本草大綱 卍

帝國圖書館藏

佐野

門 41
帖 1182
卷 1-4

李部新撰

李撰文選序　甘六味

今りふ文選いにしへ治世の下より撰い
く吾國の文章とつるよ交接をとりあた
ふ味うるつきあるいさ品と等て分別
その名ものの數つりて一文集といふりぬ
いてゝ淳和の文字をもれて西海に上る

さのり家元と尾張とをすすめ
京の人あれい和歌の一ことをも解
せぬ人と云日よ淡すへからくあ
とり撰もてつ歌の作の法の徳うく
今や太平の和よ治る御恵のかりき
時代こりさもて彼示てよ新る華表
さて弱毎よ梅ーーく京の知りをもる

白雲苦苔あるの物さもるよりてなぎ
むりて住すの神なる世よりて業体
まおのたて口をとじ古とよりしく面の体
さもしくと迎りるん柿うたのこと俗
俗説を辨ーー古の世人の仏うえい虚
しといるおどろの懐人の面およ式養をとん
やよ字の毒よ生涯とちやる徒の京よ

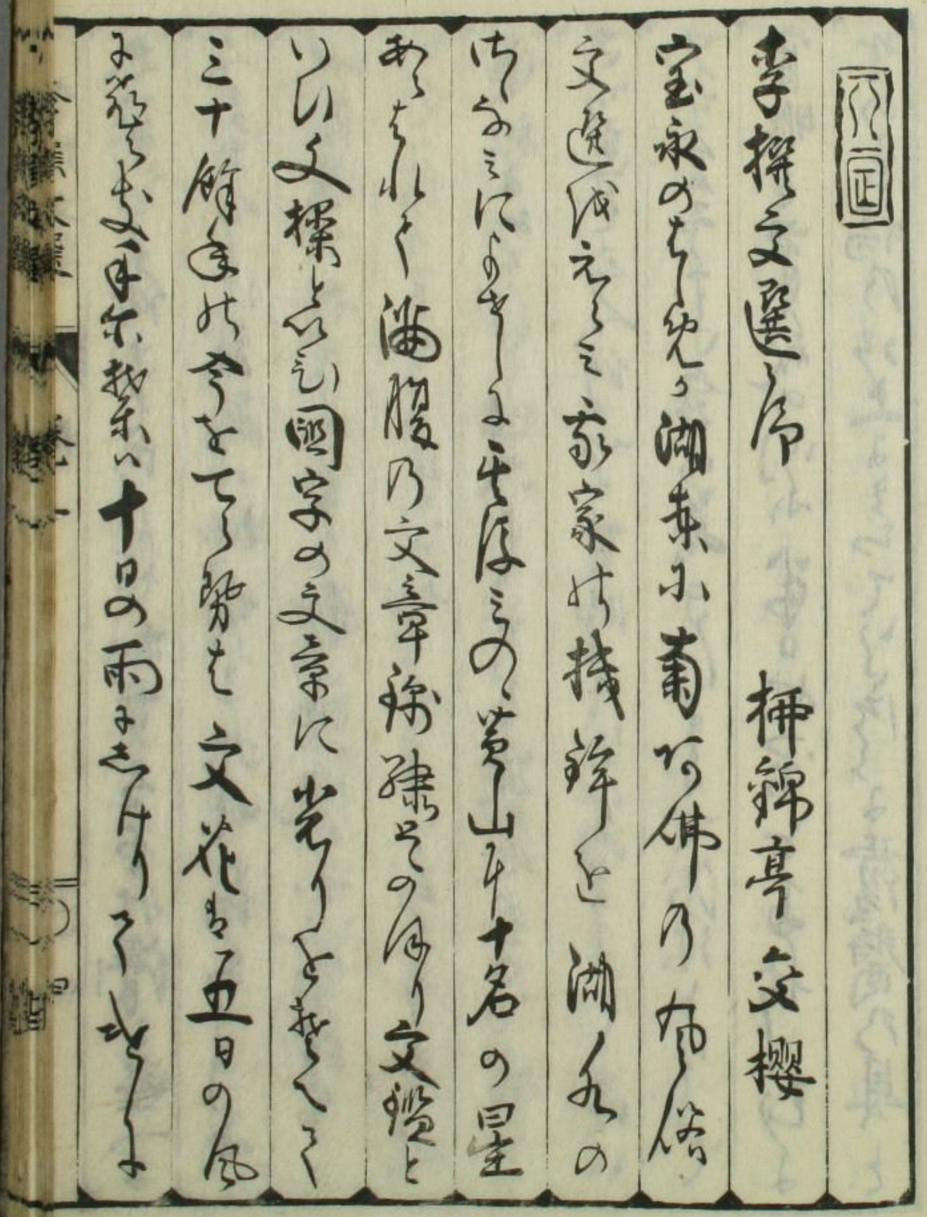
文章をとんだ四人芸の格で戯れます

さて三人寄下の腹と称して打坂こと

祝ひ人の知る所なれども

花にて酒よりも面白い洒落あること

はちまきよりあるます



挿錦亭文櫻

李探文選序

宝永のちゆんの洲乗小葡萄の仏の加倍

文選成えて彩家は機辞を洲丸の

ちなみにのそりよ千年の第山千名の星

あたりに海腹の文章孫孫その角り文櫻と

いひ文探とも同字の文章に光りをあくく

三十餘年の今をてり勢を文花を五日の風

よ花とよ文章を教へ十日の雨よりてりよ

太平とよ称ぜられんや初其志平世滑稽を遊ぶ
人多市に武都の柳塘より六味菊あり
此活機代代くしよりて我神風の玉て発渓あり
初のこ作りて考ふ昌を和すもうしよりて生平を彼
蓮社よあるいて廿六人を計て文廷三郎を窮す
さいまて三人行あり共師を名菊すて渓や
見ける正平まて年の芳を尺すて泌尿を行て
官職を第祝の間ふ第日共墨と毋共もよ
其の第稿乃上よりて行たる霞醤乃具と

化をんとす愛よ初四てひろかに渓よりて見る
えて三書探文選とい雷物すもの初や昭太子の
文選の序少毎元文とつねにるの新ちの〳〵臺と
して裏ひとう又浴よう文選よりかの文選文様乃
起と合の題の部とひらて共類〳〵とう分あつ
ちて文とえて乃の古法とてよりけるを今は
文選て最類をわきに一篇すて混雑せる
文選乃名は仮字なるを乃りよ三郎共
文稿けるう有よ其新よ遍ふ及あまて寛と

撰述の体裁と云ふべきものは詩賦よりして
之人らに文弾と云ふ人を伝ふ我家の音韻
自立する文弾也　文集（モンシュウ）の通音より全篇
也　之子は詩合也　皆一也

福井藩文庫

李撰文選序

有李学士桃溪

如絃管の音は文と比事と云ふ
ものは出生する所の事物を指す
事は作る人の心の義乃指よりて出事
ものなる物を指す　文と比事との
天工自然を以て人工備の乃を高
治乱の具察て記して動居邊の器と

まことに經世大業にして不朽に垂るべき
称すべきものなり　風月を摹し文雅
風流なるも此文談にして表されたるものなれ
ども古人猶く如く君臣日本のうまれ國は海さりて
唐土の文藻より爲るべきにあらざるなり
通じて唐土にかぶこと辛者也とのいへば
手尓遠波とうたへり風山の人も有ける
誠に文雅の君子國なる事偏にかるへ

ばなり　かの文章に以ては偏に二典をはじめて
正史実録をもて物語源語枕冊にまで此文の
枝葉なるべしとかの説明しるしまでもあり
なるべし　下ざまのいとへくもあるべし　和語
まことにあるべし　屋実は二国よりとる事は少なく山の
蛇の自生なるべし　国からにあるものなる
こともやせんさるべきや桃李の咲くいへば梅
山吹のとりいるやうに梅は文を好ませ給ふ欲

ものまねこそ世にすたれてこの道をたしなむ
ものもなかりけるを文のるふ因よりなんとをしへ
ぬるをもとこそ音のきこえ拍子もはじめずして
筆紙をもてあやとるものもんぬ叔要稗の記をひらく
ものもなかりけるを棚式下涼よりつまりしめ晴れた
楽をもこそ琴の調しかんを情ハ聚性の国の
はしめくにも耳へきやうかくてで楼段も攀ず
崑玉をもこそ拾ハで蕪に玄輙流井一義よ説し

心をもてんに紙作るる大性をこ義と情をこ義を
性しめは遠をもこそ明かなるハ時を
動り清風を茅るきゝんはをなこ
をもこそきの長ありひとりの友拍をそ友禅の
時あ唐するもこそふ世文をもて性を義ふ
のよはがをまこあをてを拍をするに
二子の文行をはへるをうを稗しぬを
をもこそ乃樋よ為りれをよをぬてるつゝふ

嵐の文は陰陽雷雨の変化をあらはさん
とにこの二子いさゝか其のうのくもりあれも
ふくの玉を遊ぶ人はてまもなくかぬな
樵木よりてくを載のかるゝ人あり小楽を
同うせる味ひ〳〵しんとあるを力を用く
李下ふつゞいてこの子者の志ばせあり
そを色を撰りこうかを拾てす法を楷める功
つりれいはてちよ文物の学ばとるまく

李撰文選とをつけるゝ所をと
うこの乃人のおもてかのうふ云侯のをとりまり
ばしるおこてはねをるやとい人ほふ
まるを云て花ゝ丈相さへ多ふて
山部云ふ山ういく晩ろ詰侯めん
さあて一李の秋はへ暮色めるば中ゞて
西山よ月傾ちて江村のちまゝ海のる
口時の変化ぞたゞなゝぬしふよ丈人跋沢

して去るにそもそも貫通と通ずるとの文勢
殆んど決して通ずるものなしと雖
もそれを序とすべし云

寛暦十一辛巳年仲秋京師

昌平坂學問所

李撰文選目録

巻之一

蕪城賦　六味
桃花源記　桃溪
雪賦　支離
陽春賦　六味
鵩鳥賦　桃溪
猛虎行　支離
巻之二

射雉賦　六味
風賦　桃溪

嘆藏

送六味菴之茅野序　交楊

送桃溪子赴川越序　桃溪

与支楊子文　支楊

赤水二生ノ編　六味

羅ノ解　〃

求二郎序　交楊

阪中ノ解　桃溪

石城秋日ノ解　支楊

風ノ城　交楊

讀汎ノ城ノ　六味

三人ノ編ノ解　〃

蔵ノ解　桃溪

ノ内ノ編　六味

十六夜ノ対　桃溪

歌ノ論　支楊

蔵ノ　〃

大島公ノ伝　桃溪

大島公ノ伝　交楊

附録ノ説　桃溪

記事 交櫻
雲ノ碑 六味
老之四
紀季ノ碑 六味
酒ノ論 桃溪
解ノ論 六味
拷衣ノ曲 交櫻
卜宅ノ詩 桃溪
琴素出函ノ文 六味
士農工商ノ弁 交櫻
松竹鶴亀ノ頌 桃溪

記事

桃溪
交櫻

吾輩六味翁ノ文ヲ慕テ年頃筆硯ニ遊フニ賢不肖ノ文章既ヲ二百余編ニ及フ爰ニ於テ往シ寅ノ年カ梓行ノ冊ヲ六翁ニ申セハ翁モ元来此志ナキニシモアラス何レノ年ニカ竹尾ナルモノ此事ヲ企シニ早ノモ地下ニ至リ其後門調ノ人稀ナルニ今ヤ二子ノ大志アル社老ノ身ノ幸ナレト彼畢鉢羅ニ三人篭リテ密ニ校訂スルヲ其子ノ四明子サヘ是ヲ知ラス其妻ハカリハ鎰ノ穴ヨリ入テ翁ノ起臥ヲ助ケヌルニミニ粗其選ノ意ヲ知レルノミ也物ハ隠レタルヨリアラハレタラン社トハイヘ偏ニアラハレタルヨリ隠レテ又アラハレタルモ面白カラン上テ斯ハ秘蔵シケル也サルカ中ニ翁ハ例ノ病カチニテ物モ六借気ナレハ適心ニメナル昼ニ夜ニ彼是ノ品ヲ定ルニ〻ニ日ノ駒月ノ鼠モ止ラテ

卯ノ年モイマダ成ラス辰ノ春ハ此翁モ泉下ノ客トナリヒケルミノ實ニ子ハ筆ヲモ断ヘキ思ヲナシヌ然ハアレト生前契リシヿヲナノ言ヲ養ム輩ナランヤト已カ不敏ヲ忘レテ此志ヲ繼ニ翁ノ雌黄ニモレタル物モアレハ是非イツレトカ定カタク待レトヨシヤ世中ノ浮草ナレハ強テ恥ヘキニモアラスト既ニ木ニ鏤ントスルニ揚氏カ恐レシ四知モ去ルヿニテ四明ノ子ノ耳トクモ此事ヲ止メテ云クサイツ頃亡人知己ノ人々遺文ヲ不朽ニナスノ志アリテ文庫捜レヲ乞ハレシヿアリ其志ノ切ナル吾身ニ於テ謝スヘキノ詞ナケレト翁ハ生涯名利ヲイトヒテ隠逸ヲムネトシケルヽ蛾ノスサミノ書捨ノ世ニ出ナンモ本意ナラシト固ク辞シテ一ツノ文塚ニ封レヌ今此事モ思ヒトヽリテヨト頻ニ申サレケレ氏イカヽハセン彼在世ノ密約ヲヨシサラハ罪ハ吾ニ社稷ルヘケレト例ノ無分別ニ四明ノ意ヲノムキテ先世余章梓ニ彫リテ亡翁ノ墳前ニ備ヘ李氏カ志ヲ追フシカナリ

李撰文選巻之一目録

一　東帰ノ辞　白味
二　論鍼灸ノ辞　桃溪
三　原吹ノ辞　文橘
四　美ノ論　白味
五　離ノ論　龍溪
六　猫ノ箴　文橘

李撰文選巻之一

一　愛蝶辞　六味

[illegible]

荘子の書にして絶くなるを化するの人百世の宗師
と云る是一志うハ子の蝶と和せさるんの胡蝶と
幕さらんやしかるに蝶と和せさるんの胡蝶と又幕りて
幕相とされとも又物化と以ひたる楽處と
いふへきとす

二　論叢汁辞　　桃溪

○神竜月の素本枯たるを吹て高くうるをもて
人のわたつつ見たるやよ行かつ多つる海とのの冬ふ
のりぬるかとしいつ
○蓬をふして淋しき精とのれ淋すぬるの白妙よ

雷給人を殺さんとしてゐるよりこの人ハ
なりがんの一杯よりなをてそれより
○夏雷まゝ里の老けるる晩き紅酒の具ふ関涼
と第ふ雷樓のおりむさぞ遊子のいちりなる
あゝき風もなりてゞゝ里ふ親のんなりなゞよ必ぬるさ
なりと絶まそよくゝひ暖よ先て果き
○昔神農氏と安へしゝ乃百の草を甘苦て
一日よ七十の毒ありとゆるハ民のいるつき試いやし
其うきひかゝしめんとそつゝ蛇毒を試をぬ
ゝとるゝされゝそ毒のことあやゝくおそろしゝ
さ毒かゝゝ玄服よ毒を飾まそうつゝ此人の君ふ

の毒を知ゝぬをいうなる羅人なりや
○世よ好惡の二つありて飲食ハまして人のなむ物を
おのをハぬまれされハぬむものと美しゝ好まるゝ或
惜むされ能毒の法よハあゝてはよかのゝかなそ
さふゝの此を捨を也いうよおのゝぬむ或ゝつ也とて
本よかへてくんまゝ只ふハ天時ふ双乃勇士なるゝ
さいふ人なるくゝすまし此法なるゝ
○千百中よ或ゝりなるハ常なりゝ或ふ千百中を
遊ゝて或ゝ様よあゝりなる所ゝ此さゝ人の貧乏國ぬ
○なる人友のゝゝ氏なつゝものを絶てゝゝや毒よなゝり
ぬハ素ゝとして遊よそくゝへしゝと毒よ詑して拔友の

かり行くよ其日をあやにくよ出掛の一つさへ思ひのこしてすゝ酒のことよ酸つおのゝ高へ登るよ抱もいで服するどよおとこある風情ゆゑ一ハ二ハ素面でそ其毒ありと志てうよ変とそきらすへ人をせずして取ゆる法世ゆくよ酔ぬるよけゝもち紀気ひよ酔ひ紀かゝ家七亦いんもすへゝ行りとぞ波蘭毒よ死といさきようせ一其人といれ

○とあまかくゆゑれ又世よすむるゆ乃子あんゝ子弟よあるに面き師又あゝんゝ

○行ゝさ色倫切大根の妹背を知りゝ行れハ七殿のよ深ましかこる人恨んて第ゝ人ゝで

此乳味乃立るまし紀ゝ例の施ゆ色はも

○是歌いつ色よゝあゝん取捨いれれようゆゝん書

して筆ゆ記おさむ

三　戾吹の辞

交播

むゝ虞舜の君氏法拙すきよ漢淄の竹と伐りて戾吹ゝしぬすゝ家勢ゝ伝へてゝうき世のさゞ氏竹戾吹よ家柿杏のぬゝ中秋の夫仙をせゝとうやさゝ色ゝのハ天帝の法にくゝをうけてゝ行ゝ海すを勅ゝゝるゝてあ中ゝ色かの王殺ゝ破和ひよ孫誓とりてたくゝゝゝ性よかゆ拙のすゝ安へ伝る其板

花奈と如なるこの工を出して吉祥鳥のよめで
くるさすがはよう〳〵ぬ女の御殿とそなわりはる
かく丈高きもろ〳〵の色に用とのすハ皆一也とハ
はの面の袈裟の法をかりしるや罷なくて配所の月とも
中絶えれ抱すきなう〳〵かもう罷なりして敷う
ろそうのはのれさよ志うも虎賢の軍う一盃
機縁のゆりそのしまあ〳〵に武義出人道う一せ
盃家此そうこにはもなりて只なけられよ毎う海を
いうるすうせうやあん禁秋の水鶏のこたて表を
すむるうまえ此りたう色て敷ら不動のるて
るれん怪無きいつ色のろまも丈ハはるて仏の

経よハ世生無ハ法言葉のなるよう恋の字百原の
示しうとうやあまぬれ老ふたりうるこんを
りてあるあまてきそ恋まさ恋のすなるかしきれハ
うきハこ乃と一貴して花よたうれ春よてう色塚ま
床ようこるの蓋うも冒ゆく対ゆくあうれるう
弥も始るを文のさハ春うれ女性のすやさ色ハ
丈怪無つうれと十九文法りのさもはハ已うんふ
らうへてる麻老ゆあるうり訓こたれよあく
うり仏の新も仏の変とゆ窮鼠猫とかむの法ま
ゆくつるよ嗟貧と訓〳〵さてあそこのやにれかうさ
めうんせうるうて植流の奥紙ハ訓〳〵法実ようの

筬の紙にかきしるし侍る成へし

夢ノ論　　去味

昔より夢とはてんかなき事にいひならはしたれとさ
よハあらす夢ハ百なきりのみ神夢の説を見るに
礼記の文夢に黄帝の花胥孔子の周公夢みる
胡蝶なとも理屈しいふへしましてこれにまうたらは
五十年ハ歌の浮きもんと居士の幻術なれハ
とるはたゝ誠しのことく見ぬひしと夢こそさう
麻袂よりやかて江帥の舞台まて吉夢よとり
なとしつるは申しきさ智しいふへしさきは

或ハ病指宿とはいへるよそな愛しく夢のほしさと志るして
手腕に夢をくくりて至るこれもかりゆるさる説なれハ
彼我ら蜚紙喰へて山附ハ山谿のさうしわかけ
めくる夢と見るとし情物志よいへるにて仕色なるへし
ほる口ハ夢の世よ幻のようすかと観みてそらなかきこそへと
述るといと作さもなからんと夢をそのちなむ人のえ子
気すらしも人いぬる味ハ神おもむりて躰よをせすあんる
事ならす間思離無常するする胸のかとり哉
めくらハおりしろきるかかた事うれしきまいる
るの妖なる支楽しむ事善しむ目の花くますを
派りよんのすまつらし緒ハ哉ハ一夢一城なるとし

なり菜花のきなるを眺りける八通しかゝる歌にて
大和めぐりも好ミ給ふ宮人八旅にあき居八子をも
姿を抱きまして　いひよるへき縁のよすがさへ
人めの実花はすましてそは詠者の情知りて旅枕
の折とけるに蕪なりすハおどろきて人々もこれに
ちまあらんこれハ蕪第一の徳といひつん合拾に
さる娘しれに蕪しく諸蕪つんぬも配りし思ふす蕪
まつんるといへどさの富士を見てハまた花子を見たる
人をみれハ悦に露をも見まハこれをゆるしはふ志
すなく只よきしえうりもへ人味に菜に蒸しも
あるに於たまさうふ不二とみんするもさる結の

するをはて日ハまみぢうろきき精の己やすし侍らん只
それりくこうはを能く池塘まにたびすしていまだ
さる面ふうさ蕪つけてはし蕪にしてさあて其あれハ
思ひねの蕪は遊びふるあしすい蕪てそれの花を敷める
兄などさ於れて六味菜人ならば蕪をおりゆく志つ
にて完かしこ模も南でまを己南ふハ去用あるへし

又

蘿蔔論

桃渓

秋きはうろに月ハ限あれとのさつみたる抱かれしとき例の
法師の風流なうらむ末哉すハ好すきてあらしやと惜ミ
し人をあきハいりて澁花をみんすくしかんやいづこと

宮さんもむつ〻ゐ色ハいさやなあるふ山めぐり
せんと云てゆきまよかゝてそこゝのく出ゐる
志すうよひうゐんの弟あるゑ七重八重よ折ゐ
て京東のまうゐ見うよ言ゐへる猪ハ上野う浦原
かゝゐ〻ぬ〻さのゆきずりふ家彼さへ自ゆ中ゝん
ゝきめく花のゐるよ思ひあへす其ゝけ尺寸ゐる
龍のゐゐてゝく花と横ゐりてゐゝつんゐりゝ
そこれ出ゐ陸よ入ていづち行きんゐゝりのれ此この
以へ思ゐるハゝ子の橋物もいうよゝうかゝすやゐう物
めると知て乃切りやゝ〻ゝんかゝハ人ゐをゐ出完よ
すみて人め思子の物ゝく出て倉奥と盗ゝ相ゐると

初〻ふ其国のくるあさいのゐりの正ゐゐるハ蝦夷（エゾ）女
入ゐ墨も思ゐれ多く集りてゐ思〻乃妖をゐ〻ゐ
人のゐゐ捕ゐ生てハゐれ抜屋の毒虫を吹て人を
悩ましゐれや秋ゐよ嵐猛〻いゐゐ吹ゐゐゐのかん
思むへゐの高〻花也といへハ又ゐゐりのいへゐ玉花の
生〻おの色〻う用ゐ用も皆造物者此云ゐ義也
まむ〻百ゐの人よ害あるゐ〻ゐつゐゐゐ龍ハ
させる害ゐれく梁の深岩巌の完よく通じて倉嵐と
ゐる国ゐ絶して血と咲ゐるハ酒呑童子ゐ徒ゐて上戸の
起ゐるゐ〻大敵ゐう小敵おそろ〻ゐゐかゐゐ勢ひと
ゐゐせるゐん雑龍の大ゐ〻らゐゐ〻ゐ人ゐ咲ゐきよ

凶とをあすと例の松よりうけて史実と並さしむるを
なのうへ筆者はさしてへ庭の砌よあつまり
ゐるく附属図より小女郎と称する絵ハ凶変して古く
なるをそれ平の風流なんを領主てよく別注
あるへの書をもて除ハお庭の節義よりやされハ和訓の
論より動りてハ知へうへ一分四ちうにしてるゆゑ
板の記まなるをとをひく蜘蛛ゆく通して板よ無のつく
てかりなるハ丸ちといへるをかりく尼姫茶話
なるうを又竹の筒より入るれハ反猶して出るゆく在るを
まを立ふも所地自立をを撰しくいちと別せる
とうをりやを丈理をあんりしまく去龍の源山

より流色岩ますむと天とをつけるハ月を含りし
て天と楽へまんと思へるを絵よハ服坂家の除と鞘
へ成て怒ら肩よ休せるを情むへてをすうを
戯論もかまひすくを家を情むへくを彫くを文をしべう
もあへぬハ多ぬさよ龍を出てとと異せをんよ浮ひ
まをなら芳谷徒本のめもあやよ深龍のそこ変と
いのやくとをうつりゆくへの花花の山をつけハ
年よれ玉川をへぬとまづ藤栗毛よあかをんと紅つる
ぶの松とこぶてよ品字まさよ峻かりといひしを
思ひ市さし鼎のかくたむろして皆く和歌よ拾ひ酒肴
の具よ入色ハす法情むへ岩ちまち初んぬさされ

論ハ非ラズシテ李の舎人を指ス是のんすを指るハ公変
して去と云るれ流を変よ廓然太悟すんハ悔む
らくら日西山ようすづけハ人を論ずと云きるも
称ス〻を安んずさ〻ハ龍の身生るとうう〻やまひハ
いろ〻を示人をうう〻やむへ〻したとおの〻第〻抜じ文を
りつけ是ハ龍の論し〻をいふへきとり

六　猫蔵　　交播

歇〻る猫とかるよ猫をりおう〻ハ知ハ〻ハ〻か是ら之世
相を考るよおまるちく〻ら仲の候城なりしら格ま
さ〻れ称ずあさよ耳とそそ〻ふて料理場乃海老に

同つきの者な癖まて〻を天帝より雛一羽と小別
一夜と交ハて生まかく〻のみきりれよは是いらたかりの
分仕巳よ〻と来一人の脉枕よ到て火燵の法寝元
昔之是すやされいうれちく〻の孫よむりれて大和の虎
〻と〻か〻猫ともいつ是知法れまそれりのるへし
拙めて嵐となのハ嵐ら〻のむ乃脉法て称こと知別
せるよ〻拙ちりの人ぬ仕ら称りをなむ〻いひ
てんいさこ云ひ〻ハ〻てまま〻拙てそ牡丹の芸よ眠る日も
四ハ嫁よるてとりやされとんえ花よあ〻ハて古人のとりあ
し切不ふ〻て蜀四入ハの叡術の奥妙よハ伝へ伝る
ま性ひそ〻ふよて女ぬよ是ることりふもつなれ女三の

玄の袋籠よハ及ぶ所の嫁とをりぬ共保の内者
よハるれ共なほ〻〻つゝれて花まろゝ動動も悪敷の
ゝ者とおりへや彼者も紙もる様のまゝよ宿の紙
つけるを法の納を猫すきとゝ人へゝりされいぞ嫁よ
内のむりゝ紙業内ハよく知つゝんよ知るよ其勇とぬる
ゝよ動りてハ仇のするどゝるものハ物貧の変化と
あゝく分の極さるものハ猫猴ゝ肩とゝゝべる異ふ
出産一日の暖あ迄ハ瞳子よ六時の変相とゝめ
計ゝ祭り仇ざゝゝゝゝるもいさゝ肩の世界とちゝす
るとゝゝて其身の勝ゝるゝハ世ゝの意もゝむ洞迄
とりやさハ毒迄ハ麻よまゝりて不彼の関係の板

底よりうれて果ハのゝ猫のゝるゝとゝ赤ゝ越の所
のゝ法も奥山の祢こまゝ迄れゝるも世よ彼ゝ迄て板の
板ひるゝうゝゝん妖とゝすゝのハ狐狸ゝのゝ変るふ
ゝゝのゝけ地ゝしよハ世ゝ迄も変りてゝんゆ迄ハ
長面乃友よるゝいゝゝとゝあゝりの戒めゝ法面ゝ
法文赤猫ハよく化ふゝものよいひゝゝれてゝゝのゝよ
そゝてゝゝ迄ゝつゝゝよゝ線師の店よゝりてなま
本とゝゝゝゝゝゝゝゝ乳の数とかゝゝハ又なゝ
調度よりてゝゝれゝる死ゝて迄ひゝゝゝいゝゝたん
ゝ毛ゝゝ迄上の毛ゝゝゝゝゝゝ庚毛ゝ早猫のゝゝ
ゝ変ゝるハ猫とかゝて志かゝゝて板猫ゝ知ゝゝる

こゝの〳〵ゑぶりなる丈性の利益をこそ、そのあたゝ
毛穴よりもる色きこゝを緣こゝに出ても金剛花猫と
いふのありて去るよりこのやゝこゝをかなるを載せ
ゝ色はかの〳〵すなをふ蓮ゝすなれいでそよ十二支
の別をそつ色三十六の仲男を通色こゝるハ名利を
いこゝふんのんら抑こゝ和氏猶〳〵むるふらかくハいへど
但樂の書上ゝはゝ〳〵のゝさゝるこゝ百十二教のゝ多おを
恥りかゝんさハ法色佛のゝ色跡こゝもあゝて昭陽の
ニヤンとゝ書記こゝるニヤゝ十ゝかへつてンゝこゝより
ムの字の色ハこゝ法こゝ泥仏こゝも義經こゝを唱へこゝるゝ
いこゝぬハいてゝまゝ法ゝるゝのゝるゝや鎌平子子（コ）と子子（シ）こ

のゝ色ひゝこゝこゝより文殊の除去ゝ到〳〵んもこゝかゝ〳〵こゝそ
見ゝ色ゝ好世こゝかゝ〳〵すゝ書楽ゝ起〳〵んと、京義坊
世ゝふゝ文ゝりこゝ色ゝ世書こゝ味義の地すこゝより山りの
う〳〵こゝ出ゝう〳〵ぬゝゝ也すゝて虚ゝ実ふゝのこゝゝる
文書こゝの恒世〳〵ゝる色ハゝゝやこゝゝ百ゝる書こゝ費
こゝんゝりこゝかこゝりこゝるゝこゝ緣こゝいゝまゝ〳〵めて曰

一 こゝかゝりこゝを史蜷の四ゝよゝめゝ〳〵こゝて三界の法ゝ梨
ゝ倉狭のいこゝかゝいこゝとゝゝり到〳〵く〳〵こゝ事

一 歌の殿ゝよゝおゝこゝ〳〵ゝ世ゝれこゝて〳〵ん指百愛ゝす

一 世ゝよゝんゝゝこゝ〳〵こゝ仏ゝこゝいゝ猫〳〵こゝこゝいゝハゝかゝりゝこゝ

ものさびしくて妬いぢる海くの吳竹
のなびきうゝ行る事
右ゝ除く猫目の中ねらひぬきうてかるのこと
てをもゝけゝとゝ工ゝ

李撰文選巻之一終